

B-6 局所的有生性による日本語の能動態・受動態選択

東京方言・東北方言・近畿方言の比較

小川 雅貴

東京大学 大学院総合文化研究科 言語情報科学専攻 博士後期課程

ogawa@phiz.c.u-tokyo.ac.jp

概要

他動詞文で能動態と受動態のどちらが選好されるかは、動作主と被動者の相対的な順位付けで決まると分析されてきた。また、日本語の方言間で態選択に差があることも指摘されている。これらに対し、本稿では、動作主と被動者それぞれの有生性も能動態・受動態の態選択に関与する可能性について論じる。本研究では、東京・東北・近畿の各方言の話者が、動作主と被動者の有生性をいかに把握し、どちらの態を好むのか解明するべく、他動詞文の産出実験を行った。その結果、方言間で選好する態に違いはなく、どの方言でも、被動者が人の場合には受動態が、それ以外の場合では能動態が用いられていた。だが、動作主の有生性のみ、もしくは被動者の有生性のみでも態選択が変わることが明らかになった。動作主・被動者各々の有生性が局所的に関与する点で、態選択は、日本語方言の格標示とも類似する。

1 能動態・受動態選択と日本語

1.1 理論言語学と心理言語学からの考察・方言学が示す地域差

世界中の言語で一般に、ある他動的事態を表現する際、図1の関連性階層（所謂、有生性階層）に則り、文中での動作主（Agent）と被動者（Patient）の文法関係が決まると言われている（Shibatani, 2006）。日本語では、図1の階層で低位のものが高位のものに対して動作を行う事態を受動文で表し、談話関連性の高いものが低いものに行為する事態を能動文で表すと分析されている（Shibatani, 2006）。(1)と(2)より、動作主が被動者よりも談話関連性が高い場合に(1a)の能動文が用いられ、動作主が被動者より談話関連性が低い場合に(2b)の受動文が好まれると分かる（Shibatani, 2006, p. 252）。一方、日本語では、(2a)のように被動者よりも談話関連性が低い動作主が主語となる能動文や、(1b)のように動作主よりも談話関連性が低い被動者が主語となる受動文も非文ではない。しかし、こうした文は語用論的に奇異（“pragmatically odd”）であると見做される（Shibatani, 2006, p. 252）。

- (1) a. 僕は太郎を殴った。
- b. # 太郎は僕に殴られた。（Shibatani, 2006, p. 252）
- (2) a. # 太郎が僕を殴った。
- b. 僕は太郎に殴られた。（Shibatani, 2006, p. 252）

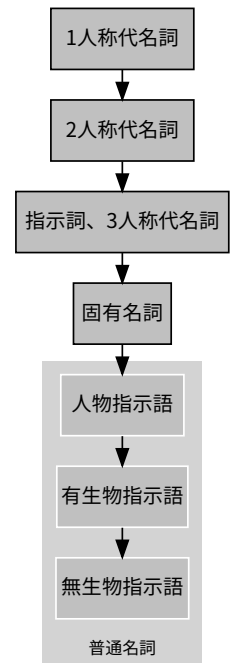


図1: 関連性階層（Dixon 1994, 85 を基に作成）

また心理言語学の実験から、一般に受動文の方が能動文より文産出・文理解の処理負荷が高いことが示されている。日本語では、他動詞文を覚えその内容を再び単文で言い直す文再認課題により、母語話者が元の文の態を変えても、無生物に対して有生物が主語になるよう言い表すことが分かっている（Tanaka et al., 2011）。さらに、他動的事象を描いた絵を単文で表現する課題の最中の視線を計測した実験より、日本語母語話者にとって他動的事象を受動文で表現する方が能動文で表現するより処理負荷が高いことが判明した（孫・小泉, 2016）。従って、理論上も、人間の認知活動からしても、他動的事象の表現の際に、談話関連性の高い動作主を主語とする能動文を産出する方が日本語話者にとって無標であるとされてきた。

しかし、ある事象を文で表す際の態選択に方言差がある可能性も指摘されている（日高, 2002, 2016a,b）。日高（2002）は東北地方と関西地方の大学生を、日高（2016a）; 日高（2016b）は日本全国 554 地点の生え抜き話者を対象に、態選択を調査した。一連の調査で図2左の「一方の人間が他方の人間を殴っている場面」の絵と同右の「犬が人間に噛みついてる場面」の絵を描写させたところ、両方の絵で西日本方言話者が東日本方言話者より能動文を多く用いていたという。

これは、能動文の産出の方が容易であり無標であるという汎言語的な原則が、日本語方言では当てはまらない可能性を示唆する。「能動文と受動文の選択において、視点の原理と動作主優先の原理のいずれが適用されやすいかに、方言差がある可能性を示唆している」(日高, 2016b, p. 274) 結果だが、なぜ各地の方言で視点の原理と動作主優先の原理の適用順に違いが生じるのかは、未解明のままである。



図2: 日高 (2002, 2016a,b) が提示した絵

1.2 受動態・能動態選択における方言差の、より精緻な検討に向けて

1.2.1 有生性と定性の分離

先行調査(日高, 2016a,b, 2002) で用いられた「人から人に行為する」場面(「人→人」条件)と「動物から人に行為する」場面(「動物→人」条件)では、人間と動物の有生性に加え定性(definiteness)も変化しており、純粋な有生性の比較とは異なる。ここで、示差的目的語標示の類型論の研究には、目的語名詞句の性質を、上位から代名詞>固有名詞>定名詞>特定名詞>非特定名詞(Non-specific)となる定性の順位と、上位から人間>動物>無生物となる有生性の順位の2次元で分析する方法がある。これに則ると、不定の動物は、固有名詞で表現される人間より、定性の点で2段以上下位に、有生性の点で1段下位にあるため、目的語標示を受けるものとして3段以上より無標である(Aissen, 2003, 特に p. 459 の Figure 4)。すると、日高の一連の研究における「犬が人間に噛みついてる場面」(図2右)での動作主と被動者の条件は、「動物→人」条件というより「不定の動物→固有名詞の人」条件と言える。不定の動物は、固有名で呼ばれる人間や固有名の動物より下位に来るため、日高の「不定の動物→固有名詞の人」条件の方が、(定性の条件が動物と人の中で揃っている)単なる「動物→人」条件より受動態を誘発しやすかった可能性がある。そこで、先行調査と同様に絵描写課題を行いつつ、今回は、絵に登場する人物や動物を不定とし、有生性だけを変えた場合を調査する。

1.2.2 記述の一般化可能性の拡張へ

先行調査(日高, 2002, 2016a,b)では、関連性階層における動作主と被動者の相対的關係、すなわち図2左の談話関連性の順位が動作主と被動者で同じ条件と、図2右の順位が低い動作主と順位の高い被動者の条件の2水準が、「殴る」「噛む」という2つの動詞に応じて異なっていた。当然、動詞に応じ動作主の種類は異なるが、態選択に影響を及ぼしうる動作主の条件と、調査で使われる動作や動詞がともに変化すると、態選択の差が動作主の違い(人か動物か)に起因するのではなく、動詞自体の意味に由来する可能性を排除しにくい。さらに、2つの動詞だけでは、動詞の使い方あるいは2つの事態の捉え方に地域差があっただけかもしれない。

一方、他動的事象(動詞の意味)1つにつき、動作主と被動者の条件(有生性)が異なる複数の場合を設ければ、動作主と被動者の有生性の違いについて、より多くの観点から比較できる。さらに他動的事象を増やせば、他動的状況一般として、態選択の方言差・地域差が強固に観察されるのか検証できる。

1.2.3 動作主・被動者の条件の細分化

また、他動詞文における文法現象の記述には、動作主と被動者の関係性を示す「大域性」と「局所性」という観点も重要である。格標示の分野では、動作主と被動者それぞれへの格付与がそれぞれ別個の素性に基づいて行われることを局所的(local)、動作主と被動者への格付与が動作主と被動者両方の名詞句の特徴に依存していることを大域的(global)と呼ぶ(Silverstein, 1976, pp. 124-125)。日本の方言における示差的目的語標示の研究では、日本の方言の大部分で、動作主・被動者各々の有生性あるいは定性がそれぞれの格標示を決める局所的な標示が行われているという。また、大域的な示差的目的語標示から局所的な示差的目的語標示へ、さらに(示差機能のない)固定の目的語標示への通時的な変化も示されている(Shimoji, 2018, pp. 111-112; 下地, 2018, p. 176)。

こうした他動詞文で生じる文法現象の局所性と大域性の観察には、条件の多様化が不可欠である。動作主の変化に焦点を当てた先行研究(日高, 2002, 2016a,b)に加え、被動者も人間と動物の2条件にすれば、局所的な「被動者が人間の場合」と「被動者が動物の場合」、大域的な「動作主と被動者が共に低位である条件(動

物 → 動物条件)」と「動作主が被動者より高位である条件（人 → 動物条件）」という観点が增える。それ故、「被動者の有生性も局所的に態選択に影響を及ぼすのか」と「有生性の点で高位の動作主から低位の被動者に行為が及ぶ時にどのような態選択が行われるのか（特に東日本では、この、一般に能動文が好まれる状況でも受動文産出が他地域より多くなるのか)」、「有生性の点で低位の者同士での行為を描写する態選択と高位の者同士での行為を表現する態選択で違いが見られるか」も捉えられるようになる。

1.3 態選択の地域差について—有生性駆動格標示と態選択の関わり

ここで、他の文法現象との関連から態選択に地域差が生じる理由を考えたい。

（書記上の）日本語のコーパス分析により、受動化の動機は動作主項の脱焦点化であり、被動者の話題性を示す機能は受動化ではなく語順や話題を表すハ格標示が担っていることが示されている (Imamura et al., 2013)。しかし、近畿方言と東北方言では、基本的には格標示をしないため、語順が動作主と被動者の区別を担っている (Shimoji, 2018)。従って、被動者の話題性を示す方略として語順が利用しにくいと考えられ、被動者の談話的卓立性を表すために受動態を用いる比重が書記日本語より大きいと予想される。

一方で、近畿方言では動作主の焦点に応じて動作主を示す格が、東北方言では被動者の有生性に応じて被動者を示す格が用いられることがある (Shimoji, 2018; 特に京都市方言については竹内・松丸, 2019)。仮に、有生性に基づく格標示と態選択に機能的な棲み分けがある場合、人間である被動者に格標示を行う東北方言の方が、被動者格で被動者の卓越性を表せるため、受動態を用いる動機は減りうる。一方、有生性に基づいた被動者格標示のない近畿方言でこそ、被動者を目立たせるのに受動態を用いると考えられる。

この帰結は、東日本ほど受動態が、西日本ほど能動態が好まれるという先行研究 (日高, 2002, 2016a,b) の記述に反するが、動作主・被動者の有生性が態選択に及ぼす作用を厳密に検討した実験で、どちらの記述が妥当か議論できると考える。

2 本実験

2.1 予測

日本本土の各地域の方言において、被動者が人間である場合には、動作主が動物の時の方が、動作主が人間の時よりも受動態が好まれる (日高, 2002, 2016a,b)。また、心理言語学的研究により受動文産出が認知的に高負荷であることも明らかだ (Tanaka et al., 2011; 孫・小泉, 2016)。故に、受動文が好まれる動物 → 人条件より、動作主と被動者が同じ関連性階層に位置する条件（人 → 人、動物 → 動物）で受動文産出が増えるとは考えにくい。従って、態選択に対する動作主および被動者の有生性の違いの影響として、次の2つが考えられる。

動作主の有生性と被動者の有生性がそれぞれ局所的に態選択を変えている場合

この場合、動作主が動物の方が人間の場合より、そして被動者が人間の方が動物の時より受動文産出率が高いと考えられる。統計的に、動作主の有生性と被動者の有生性の主効果の2つのみに有意差があると予測される。

動作主と被動者の相対的な有生性が大域的に態選択を変えている場合

この場合、動作主が動物で被動者が人間の場合にのみ突出して受動文産出率が高くなると考えられる。統計上、動作主の有生性と被動者の有生性の主効果および交互作用の全てで有意差が検出されると予測される。

2.2 実験参加者

本論の分析に採用した参加者 55 人の 2018 年現在の平均年齢は 20.31 歳（標準偏差 1.14 歳）であった。この参加者の内、東京方言圏出身者（東京・神奈川・千葉・埼玉：東大生）は 19 人、東北方言圏出身者（青森・岩手・宮城・山形・福島：山形大生）は 18 人、近畿方言圏出身者（大阪・兵庫：甲南大生）は 18 人であった。

2.3 調査で提示した絵（刺激）

2.3.1 目標刺激 (target stimuli)

目標刺激の絵には、図3の通り、人間と動物が計2個体描かれている。絵を見て、一方が他方に何か動作をしているという他動的な解釈ができるように描画した。絵は「一方の人間から他方の人間に行為が及ぶもの（人→人条件；図3a）」、「人間から動物に行為が及ぶもの（人→動物条件；図3b）」、「動物から人間に行為が及ぶもの（動物→人条件；図3c）」、「一方の動物から他方の動物に行為が及ぶもの（動物→動物条件；図3d）」の4種類である。

典型的な他動的事態（他動詞）を選ぶため、言語普遍的な2項述語の分類である二項述語階層（角田, 2009, pp. 100–123）の内、「直接影響」を表す1類に属しうる動詞を用いた。この種の動詞が表す動作は、実際に被動者側に届くものであり、具現化の様子も視認できる（角田, 2009, p. 100）故、絵で表現しやすいと考えられる。さらに、直接受身文が作りやすいことも知られている（角田, 2009, pp. 116–117）。

最終的に「追いかける」「殴る・叩く」「蹴る」「撫でる」「引っ張る」「押す（突き飛ばす）」「助ける」「引っ掻く」「擦る」「起こす」の10項目の他動的事態を描いた絵を作成した。さらに、絵の中での動作主と被動者の配置が文産出に影響を与える可能性を相殺するため（孫・小泉, 2016）、全ての絵に左右反転版を用意した。



図3: 目標刺激の例と実験条件（「追いかける」）

2.3.2 攪乱刺激 (distractor stimuli)

攪乱刺激の絵には、人間または動物が1個体描かれている。「(お腹を) 痛める」「(水に) 飛び込む」「(坂を) 上る」「(坂を) 下る」「(水を) 飲む」「(肉を) 食べる」「(木に) つかまる・ぶら下がる」「(手・足を) 折る・怪我する」「(柵を) 跳び越える」「(頭を) 掻く」「(切り株に) 座る」「(リンゴを) 取る」「転ぶ」「怒る」「走る」「寝る・眠る」「伸びる（伸びをする）」「泳ぐ」「歩く」「欠伸する」を絵画化した。どの絵にも左右反転版を用意した。

2.4 調査手順

2.4.1 調査計画と実験プログラム

各大学の実験室にて、心理言語学的実験用のウェブフォーム Ibox (Drummond, 2018) *1により、絵を単文で描写する実験を行った。1つの他動的事態から生じた絵は、参加者間でカウンターバランスされたため、どの参加者も、同じ他動的事態を表していながら条件が異なる絵は見えない。そのため、参加者1人につき、異なる10個の他動的事態を表した絵が1つずつ提示された。なお、攪乱刺激も、参加者間でカウンターバランスされ、参加者1人につき、異なる20個の絵が1つずつ提示された。

本プログラムでは、目標刺激が連続しないよう、間に必ず2つ攪乱刺激を入れた。表示される絵の順番も参加者ごとにランダムにした。故に、絵の提示順が文産出に及ぼす影響は可能な限り減殺されたと考えられる。

2.4.2 調査手続きと実験参加者への教示

実験参加者には、絵中の他動的事態と事態参加者を単文で表し、最初に考えた文を書くよう指示した。参加者は、練習課題で2枚の絵*2を単文描写した後、計30枚の絵を描写する本課題に臨んだ。本課題の直前に、参加者には、本課題では回答に要した時間を計ることを伝え、文を思いついたら早めに記入するよう教示した。

練習課題と本課題のページでは、目標刺激や攪乱刺激が1枚ずつ提示され、各々の絵の提示と同時に、絵の下部に入力欄が表示された。入力欄は短文回答方式であり、字数制限はなかった。実験参加者は、入力欄に記入を終えた後、「次に進むには、ここを押してください」という文をクリックし、次の絵を閲覧した。

*1 なお、本実験で使用したフォームはhttp://spellout.net/ibexexps/Carlos_Luis_Rivera/beta/experiment.htmlである。

*2 練習課題専用の絵で「鳩が飛んでいる様子」「男が草を塗っている様子」を描いたものである。

2.5 産出された文の選択とその基準

実験で産出された文では統語構造が様々であり、全ての文で態を一概に比較するのは必ずしも適切とは言えなかった。そこで、Prat-Sala and Branigan (2000, pp.173-174) が示した下記の3点を軸に、本調査で得られた全産出文の内69.5%を占める382文を選択した。

- (1) 目標刺激の絵の中にある2つの対象物両方に言及していること
- (2) 能動態・受動態両方で使用可能な動詞を含んでいること
- (3) 1試行の中で最初に発話された完全な文のみを評価し、主語が異なる単文が等位接続された重文は除外すること

(1)に関して、絵の中に描写されている事態参与者全てに言及し、かつ事態参与者のどちらがどちらに働きかけているかを正しく描写できている文を分析した。さらに、どちらが動作主でどちらが被動者なのかを正しく認識できているかも判定した。

また、産出された文において、動作主や被動者が名詞句で表現される場合と、主要部内在型関係節で表される場合では、統語構造が大きく異なる。本論では、動作主・被動者が名詞句として表された文のみを分析対象とした。実際に「黒い馬が白い馬が走るのを必死に止めている」という文があったが、ここでは除外した。

(2)に関して、Prat-Sala and Branigan (2000)と同様、能動態・受動態両方で使用可能な動詞を含む文だけを分析するため、産出された文が他動的事態について述べていれば分析した。だが「犬が人を追いかける」絵に対する「緑色の服を着た男性が茶色い犬から逃げている」という文などは分析対象外とした。

また、調査協力者の絵の解釈が、絵が表現している他動的事態と一致している文を分析した。例えば「殴る」の絵に対し「殴る」相当の他動詞が使われていた場合、当該の文を分析した。この基準により「起こす」の絵に対する「オレンジの犬(柴犬)がベージュの犬を撫でている」という文などは分析には採用しなかった。

さらに「猿の毛づくろいをする」「蹴りを入れる」のようにヲ格で表された名詞句がないと1つの動詞として意味解釈が出来ない文、すなわち機能動詞・軽動詞が使われた文は除外した。

(3)に関して、複数の述部が等位接続されていても、単文に分解した際に、いずれかの単文に能動態か受動態が含まれている場合は、その単文の態(能動態か受動態)で文全体の態を代表させた。例えば「紺色のシャツの男が、カーキ色のシャツの男の手を引っ張ってこけさせた。」という文は「紺色のシャツの男が、カーキ色のシャツの男の手を引っ張った」と「紺色のシャツの男が、カーキ色のシャツの男をこけさせた」に分けた際に、前者の単文に能動態が含まれるため、能動態として分析した。

また、複数の述部が等位接続されているものの、単文に分解した際、全ての単文で同一の事態参与者が主語になっている場合には分析に採用し、単文間で異なる主語が用いられている場合には分析から外した。

3 実験結果—調査参加者の能動態・受動態の選好性

表1に条件ごと、地域ごとの能動文・受動文の産出文数と産出率を示す。関連性階層(Shibatani, 2006)において動作主と被動者が同じ地位にある条件、人→人条件と動物→動物条件では、受動文産出率がそれぞれ20%以下となった。地域ごとの変動も少なく、全地域で能動文産出の方が優勢であった。また、人→動物条件でも、全地域で受動文の産出率が10%以下になった。但し、動物→人条件では、他の条件に比べて、受動文の産出率が上昇した。そして4条件における産出傾向に顕著な地域差は認められなかった。

態選択に対し、動作主・被動者の有生性の違いや地域間の差が有意な影響を与えていたかを精査するため、プログラミング言語R(R Core Team, 2018)のlme4パッケージ(Bates et al., 2015)を使用し、一般化線形混合モデルに基づく統計解析を行った。

本実験における応答変数は、能動態か受動態かの2水準であり、二項分布に従うと仮定された。また、説明変数は、動作主および被動者の有生性の2要因(ともに人間か動物かの2水準)と地域差の2要因(東北

表1: 各条件の能動文・受動文の産出数・産出率

条件	態	東京方言		近畿方言		東北方言	
		文数	(%)	文数	(%)	文数	(%)
人→人	能動態	30	83.3	28	80	29	82.9
人→人	受動態	6	16.7	7	20	6	17.1
人→動物	能動態	33	97.1	29	93.5	35	89.7
人→動物	受動態	1	2.9	2	6.5	4	10.3
動物→人	能動態	21	61.8	15	57.7	25	64.1
動物→人	受動態	13	38.2	11	42.3	14	35.9
動物→動物	能動態	23	92	21	91.3	23	92
動物→動物	受動態	2	8	2	8.7	2	8

方言であるか否か、近畿方言であるか否か)であった。有生性の要因については、人間の方が動物より階層の上位に位置するため (Shibatani, 2006)、人間の方により高い数値を設定した。また全ての説明変数で水準数が2水準であるため、これらを数値扱いとし、中心化した。なお、リンク関数はロジット関数である。

また、モデル選択には、後退的選択法を採用した (新井・Roland, 2016)。選ばれたモデルは、実験参加者とアイテムに関するランダム項各々に切片のみを含むものであった*3。

表2に選出モデルでの分析結果を示す。動作主、被動者各々の有生性に有意差が見られた。だが、地域差に関する効果や交互作用は有意でなかった。

図4は、選出モデルの各条件における受動態産出率の予測値を示している。人→人条件では受動態産出率が10%近辺となり、被動者が動物である条件(人→動物、動物→動物条件)では受動態産出率が5%を下回る一方、動物→人条件でのみ受動態産出率が30%を超えると予測されている。

以上より、東北、東京、近畿では方言圏に拘わらず、「動作主が動物である」場合および「被動者が人間である」場合に受動態が選好されることが分かった。そして表2の統計結果において、動作主と被動者それぞれの有生性の主効果両方において有意差が見られたため、動作主と被動者の有生性も個別に文産出に反映されていると考えられる。図4の棒グラフが示す「動作主が動物で、かつ被動者が人間の場合に受動態が選好される」現象は、動作主と被動者それぞれの有生性がともに受動態を惹起したためと説明できる。日本語方言における示差的目的語標示に関する研究では、こうした局所的有生性により目的格が変化する方言が多いことが知られている (Shimoji, 2018)。本実験の結果は、示差的目的語標示に加え、態選択にも局所的な有生性が関与していることを示している。

表2: 受動文産出率に対する各説明変数の係数

	推定値と(標準誤差)
切片	-2.447 (0.458)
	$p = 0.000^{***}$
動作主の階層(有生性)	-1.017 (0.397)
	$p = 0.011^*$
被動者の階層(有生性)	2.062 (0.430)
	$p = 0.000^{***}$
東北方言か否か	0.380 (0.649)
	$p = 0.559$
近畿方言か否か	0.447 (0.669)
	$p = 0.504$
動作主と被動者の交互作用	-1.283 (0.804)
	$p = 0.111$
動作主と東北方言の交互作用	0.566 (0.940)
	$p = 0.547$
動作主と近畿方言の交互作用	0.021 (1.003)
	$p = 0.983$
被動者と東北方言の交互作用	-0.909 (0.985)
	$p = 0.357$
被動者と近畿方言の交互作用	-0.204 (1.049)
	$p = 0.846$
動作主と被動者と東北方言の交互作用	-1.165 (1.933)
	$p = 0.547$
動作主と被動者と近畿方言の交互作用	-0.347 (2.054)
	$p = 0.866$
分析に含めた文の数	382
対数尤度	-147.876
赤池情報量規準	323.753
ベイズ情報量規準	378.989

凡例: * $p < 0.05$; ** $p < 0.01$; *** $p < 0.001$

4 総合論議と今後への展望

本研究では、2000年代の大学生を対象にした調査(日高, 2002)や、2010年代前半の生え抜き話者を対象にした調査(日高, 2016a,b)を受け、2010年代後半の大学生を対象に、態選択の方言差を見る文産出実験を行った。その際、先行調査よりも対象とする他動詞を増やし、実験条件を有生性に絞りつつ、動作主と被動者のそれぞれの有生性が態選択に関与するか検証できるようにした。その結果、動作主および被動者の有生性が各々独立して態選択を決めており、動作主については人間より動物の場合の方が、被動者については動物より人間の場合の方が受動態を選ぶ確率が高いことが分かった。

この事態参加者の有生性の影響の出方あるいは全般的な受動態選好性に、統計的に有意な地域差は観察されなかった。従って、2000年代前半に大学生を対象に行われた調査結果(日高, 2002)も考慮すると、2010年代後半の若年層においては能動態・受動態選択に関する地域固有の傾向が失われている可能性もある。先行調査(日高, 2002, 2016a,b)には、東日本で受動態が好まれるとの記述があった。しかし、今回の実験結果において、東北・東京・近畿方言の間では、東北方言と東京方言の方が近畿方言より受動態を好むという傾向は

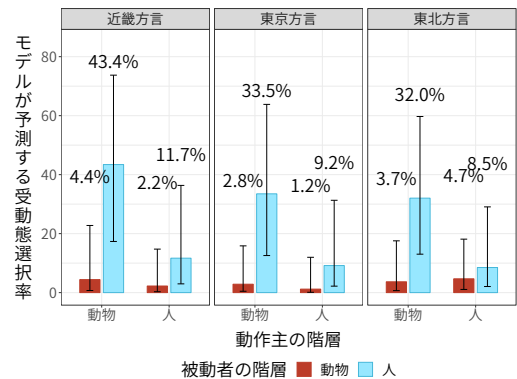


図4: 各条件の受動態産出率の予測値と95%信頼区間

*3 $glmer(\text{態選択} \sim \text{動作主の有生性の主効果} + \text{被動者の有生性の主効果} + \text{東北方言か否か} + \text{近畿方言か否か} + \text{動作主と被動者の交互作用} + \text{動作主と東北方言の交互作用} + \text{動作主と近畿方言の交互作用} + \text{被動者と東北方言の交互作用} + \text{被動者と近畿方言の交互作用} + \text{動作主と被動者と東北方言の交互作用} + \text{動作主と被動者と近畿方言の交互作用} + (1 | \text{参加者で層別}) + (1 | \text{アイテムで層別}), \text{family} = \text{"binomial"}, \text{data} = \text{Selvoice}, \text{control} = \text{glmerControl(optimizer} = \text{"bobyqa"})$

見られなかった。また、有生性の点で高位の動作主から低位の被動者に行為が及ぶ、通常能動文が好まれる条件（人→動物条件）においても、東北方言と東京方言の話者は、近畿方言の話者と同様に能動文を多く用いた。

しかし、(1) 東北・東京・近畿方言圏の話者は、同じく有生物であるにも拘わらず、被動者が人間であるか動物であるかに敏感に反応し、被動者の有生性に応じて態選択を行っていたことが分かった。また、(2) 2つの事態参与者間の相対的な有生性で能動態や受動態が選ばれているというよりも、動作主の有生性だけもしくは被動者の有生性だけでも態選択が変わる可能性が見出された。さらに、(3) 動作主と被動者が有生性の点で同じ条件であっても、動物→動物条件より、人→人条件の方が受動文産出率が高いことも明らかになった。これらは、関連性階層における、動作主と被動者の相対的な順位の違いで態選択が変わるという見方 (Shibatani, 2006) だけでは説明できない。特に、関連性階層において低位の動作主が高位の被動者に働きかける場合に受動態が選ばれるのは、動作主の関連性階層における順位が低ければ受動態が選ばれやすく、被動者の関連性階層における順位が高ければ受動態が選ばれやすいという2つの独立した傾向が組み合わさった結果であることを示唆している。また、動作主と被動者が局所的に文法に關与している点で、態選択は、日本の方言の多くで観察される、他動詞文での格標示が複数の事態参与者の内の1つだけによって決められるという局所的な格標示方略 (Shimoji, 2018) と類似した現象とも捉えられる。

これらの事実は、被動者の有生性に変化を持たせたからこそ観察可能になった。今後の態選択の方言調査において、動作主だけでなく被動者の条件も考慮する意義が示されたのである。

本稿では、動作主と被動者の有生性の観点から、日本語での能動態・受動態選択を議論した。だが、焦点や定性など他の名詞句の特性が、各方言での他動詞文産出にどのように關与しているかは、さらに検討する余地がある。また本研究は、産出された文だけでの議論であるため、能動態・受動態選択を行い実際に文を産出するまでの認知活動について、さらなる検証を要する。今後、文産出の過程を行動計測で明らかにすることにより、能動態・受動態選択における動作主や被動者の影響力について、さらに検証が進むと考えられる。

参考文献

- ★Aissen, J. (2003). "Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy". *Natural Language & Linguistic Theory*, **21**(3) pp.435–483. ★Bates, D., M. Maechler, B. Bolker, and S. Walker (2015). "Fitting Linear Mixed-Effects Models Using lme4". *Journal of Statistical Software*, **67**(1) pp.1–48. ★Dixon, R. M. W. (1994). *Ergativity*. Number 69 in Cambridge studies in linguistics. Cambridge University Press. ★Drummond, A. (2018). *Ibex (Ver. 0.3.9)*. ★Imamura, S., E. A. Helgason, and M. Koizumi (2013). "A Functional Analysis of Japanese Passives". In *Proceedings of the 16th Conference of the Pragmatics Society of Japan*, pp. 209–216. The Pragmatics Society of Japan. ★Prat-Sala, M. and H. P. Branigan (2000). "Discourse Constraints on Syntactic Processing in Language Production: A Cross-Linguistic Study in English and Spanish". *Journal of Memory and Language*, **42**(2) pp.168–182. ★R Core Team (2018). *R: A Language and Environment for Statistical Computing*. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. ★Shibatani, M. (2006). "On the conceptual framework for voice phenomena". *Linguistics*, **44**(2) pp.217–269. ★Shimoji, M. (2018). "Dialects". In Y. Hasegawa, (ed), *The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 87–113. ★Silverstein, M. (1976). "Hierarchy of Features and Ergativity". In R. M. W. Dixon, (ed), *Grammatical Categories in Australian Languages*. Canberra: Australian National University, pp. 112–171. ★Tanaka, M. N., H. P. Branigan, J. F. McLean, and M. J. Pickering (2011). "Conceptual influences on word order and voice in sentence production: Evidence from Japanese". *Journal of Memory and Language*, **65**(3) pp.318–330. ★竹内史郎・松丸真大 (2019). 「京都市方言における情報構造と文形態：格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則 (編). 『日本語の格標示と分裂自動詞性』. くろしお出版. ★角田太作 (2009). 『世界の言語と日本語改訂版：言語類型論から見た日本語』. 東京：くろしお出版. ★新井学・R. Douglas (2016). 「言語理解研究における眼球運動データ及び読み時間データの統計分析 (特集 統計的言語研究の現在)」. 統計数理, **64**(2) pp.201–231. ★日高水穂 (2002). 「ヴォイス (受動文を中心に)」大西拓一郎 (編). 『方言文法調査ガイドブック (科学研究費補助金研究成果報告書)』. 国立国語研究所, pp. 37–63. ★日高水穂 (2016a). 「136 殴る・殴られる」大西拓一郎 (編). 『新日本方言地図：分布図で見渡す方言の世界』. 朝倉書店：分布図で見渡す方言の世界, pp. 272–273. ★日高水穂 (2016b). 「137 噛む・噛まれる」大西拓一郎 (編). 『新日本方言地図』. 朝倉書店, pp. 274–275. ★孫猛・小泉政利 (2016). 「態と語順が日本語の文産出時の処理負荷に与える影響について：母語話者と学習者との比較」. 東北大学言語学論集, (24) pp.15–30. ★下地理則 (2018). 「方言研究と総合的記述」. 『日本語学会 2018 年度春季大会予稿集』, pp. 171–176. 日本語学会.